

徳 朋

信じていれば神様が守ってくれる

亀井 鑛 ひろし



かめい ひろし

1929-2021

愛知県出身。若い頃より熱心に聴聞し、同朋新聞編集委員、NHK「こころの時代」司会者としても活躍する。

南アメリカのブラジル、サンパウロ市の南米本願寺。そこで開教総監督をしていらした両瀬正男まさおさんから、以前こんな話を取材させてもらったことがあります。パラナ州アサイ市の中心街アベニードリオデジャネイロで、バー付きの雑貨店を営む、日系二世の中島康夫なかじまやすおさんは、若い頃から生長の家、天理教、真光教などを遍歴した後、仏教を聞くようになった人。ブラジルでも北米同様、泥棒対策として各個人が銃砲を携帯備蓄するのが一般慣例。

中島さんのバーへ、体格のいい黒人ボスのオスカルが、教会の日曜礼拝の後、ビールを飲みに来て、腰に携えた武器を自慢げに見せていました。中島さんが酒を注ぎながら、「お前、神様を信じているんなら、そんな武器に頼るんでなしに、神様が守ってくれるのと違うか」と聞く。オスカルは「これは万一の防御用だよ。人を殺す気はないよ。お前だって店を経営してれば用心して武器を持つだろう。俺は息子五人と娘四人が成人した日に、皆に一挺ずつ買ってやるんだ」と言う。

「じゃあ、今日まで十八年間でそれを使ったことはあるのかい」

「いや神様のおかげで一度もない」

「いかに神様のおかげだろうな。もし泥棒に入られ、お前がそれを取り出したら、相手は先に

お前を撃ってくる。武器を持たなきゃ、金と物を盗られるだけで済む。これまで事件が起きて殺された被害者は皆、護身銃を持った人ばかりだ。親から成人式にもらった銃が逆に凶器になった例は多い。私は日本人の父母とお寺に通い、仏さまの教えを学んだ。人は皆生まれ、生き、老いて、病んで、死を迎える。その間に災難も病気も不祥事もいろいろ経験する中で、自分優先、自分第一、万事自分の思い通りの計算ずくは通らない。譲る、負ける、損することも受け止めるのを認める。物事すべて、浅く一方的に決めないで、多角的に深く考えて探っていけば、そこ（底）に開かれた道がある。武器など無用の平和な世界だ」

オスカルは聞きながら、うなずいてくれた、と言います。

二月くらいたった頃、オスカルが店に来ました。黙って大金の小切手を見せるのです。

「何だ牛か馬でも売ったのか」

「いや。お前の仏さまの話が家族で話し合っ、皆の武器を売って、聖書を一冊ずつ買った残りの金だ。ナカジマはおれたちをジゴク行きから救ってくれた」と肩を抱いて涙ぐんだ、と言うのです。



(『生きるとは何か』)

上記の「物事を浅く一方的に決めつけて」一喜一憂して生きているのが私たちです。私たちの浅い見識では「生老病死」の人生には間に合わない事を仏教は教えています。「多角的に深く探っていけば、底に開かれた道がある」。大事な教えです。(哲弘 拝)



この「徳用」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、頭で分からなくても構わないので気にせず読んでみて下さい。